

科学と人のアートによって醸成される、一人ひとりの自律に基づく死生観に裏打ちされた超高齢社会

Science and Humanity for Fostering a Super-aged Society that Respects Individual's Views on Life and Death and Their Autonomy

研究代表者 山川みやえ(医学系研究科 准教授)

研究協力者

[学内] 土岐博(核物理研究センター 名誉教授) 鈴木径一郎(社会技術共創研究センター 特任助教) 木多道宏(工学研究科 教授) 杉田美和(工学研究科 特任准教授) 佐藤真一(人間科学研究科 名誉教授) 吉田美里(医学系研究科老年看護学研究室 特任研究員) 瀬戸ひろえ(人間科学研究科行動統計科学研究室 博士後期課程) 高井悠花(工学研究科保健学専攻 博士前期課程)

[学外] 勝眞久美子(なな-る訪問看護ステーション 管理者) 鎌田大啓(株式会社TRAPE 代表取締役社長)

河上崇陽(Code for Osaka 理事、株式会社グルメ軒屋 Chief digital officer) 庄瀬寛(一般社団法人シニアライフ協会) 宮崎宏興(NPO法人いぬいぶる 理事長)

福村雄一(東大阪プロジェクト代表、司法書士法人山西福村事務所) 瀧澤一賀(一般社団法人シニアライフ協会)

共同研究機関・連携機関

吹田市(福祉部・健康医療部) 豊中市(福祉部) 箕面市(健康福祉部) 社会福祉法人大阪府社会福祉事業団 東大阪プロジェクト 公益財団法人浅香山病院

NTT PARAVITA 日本電気株式会社(NEC Corporation) パナソニック株式会社 Amame Associate Japan株式会社

1. プロジェクト概要

本プロジェクトは、大阪大学 SSI 基幹プロジェクト「一人ひとりの死生観と健康自律を支える超高齢社会の創生」の継続プロジェクトとして今年度よりメンバーを拡大して始まりました。ここで掲げる「自律」とは、一人で何でもするというのではなく、コミュニティに存在するさまざまな資源を使って自分の意思をできるだけ最期まで表現していくことを意味します。超高齢社会を生きる「人」の生活に焦点をあて、一人ひとりが人生を「アート」としてデザインでき、さまざまな諸問題に対して納得解を得ることができるように、人間性(Humanity)と科学(Science)の融合によって環境を整えていくことが目的です。



2. 2022年の取組

① キックオフシンポジウムの開催

2022年9月14日に公開シンポジウム「超高齢社会の諸課題に対するデザイン思考とその戦略」をハイブリッド形式で開催し、当日は会場約50人、オンライン約110人



にご参加いただきました。デジタルや都市構想として新たな視点で切り拓くクリエイティブな挑戦と、個々の死生観や現状の課題に挟まれたジレンマなどについて熱い想いが飛び交いました。会場/オンライン共に議論は止まず、閉会後も会場では1時間以上意見交換が続きました。

② 個の尊厳を高める終末期ケア

7月の6日間に渡り、「モンテッソーリケアワーカー養成コース」を、第一人者であるアン・ケリー氏をお招きして開催しました。AMI(国際モンテッソーリ協会)友の会NIPPONの総会后、「サービス付き高齢者向け住宅『柴原モカメゾン』・看護ホスピス『もかの家』での実践と、大阪大学との連携によるモンテッソーリライフの構築に向けて」の講演もしました。企業と共同でBeyond 5G時代の「未来の介護」の研究をリビングラボの活動として進めています。



③ 介護の生産性向上の人材育成

研究協力者鎌田氏が代表のTRAPEが先進的に進める介護業界において生産性向上の取り組みは、厚生労働省事業やTRAPEが提案する対話型サービス「ソシユエル」を通して、さらにマネジメントやテクノロジーの活用を加速させました。今後も介護事業所の生産性向上や働きがい向上を生み出し、新たな介護の価値向上を生み出すことができる自律的人材育成を行なっています。

超高齢社会というチャレンジングな変化の中で 一人ひとりの人生を豊かにするために

④ 地域コミュニティの活性化

自治体と協力し、木多研究室の学生が千里ニュータウンで親子を対象とした空き室の内装づくりのワークショップを実施したり、また地域のハブとなる建築を構想し模型を出展しました。これらは11月に市民と企業が立ち上げた「千里祭り」のイベントにもなりました。命を継承するコミュニティづくりのコンセプトを9月のシンポジウムと特別講義にて発表し、大反響を得ました。

⑤ 公共図書館での地域共生

吹田市立健都ライブラリーの地域包括ケアへの取組として多世代を対象にしたイベントを開始しました。まず最初に転入者の父親を対象に子育て支援についての勉強会やネットワーク構築の研修を保健師などと協働して始めました。今後高齢者にも広げる予定です。

⑥ 高齢者の自己実現

“介護予防ダンス指導士”として、豊中市千里文化センター公民連携事業や大阪昭和歌謡音楽隊のコンサートなど様々な場所でダンス指導や50～90代の幅広い年代の方々と一緒にダンスをしました。ダンスによる身体・精神・認知機能への良い影響をアプローチし続け、ダンスから地域のコミュニティを作っていきます。

⑦ 医療介護の連携と地域ネットワークづくり

東大阪プロジェクトでは医療介護だけでなく多様な職種を巻き込んでいます。医師会主催の研修会の参加枠を異業種にも広げ、地域の企業（珈琲販売・カフェ運営等）と「縁起でもない話をしよう会」という緩やかなアドバンスケアプランニング（ACP）を体験する研修会を開催し、地域の力を強くしながら活動を進めています。

⑧ 死生観の醸成

10月にACP啓発活動として、豊中市出前講座を、同市保健福祉部高森氏を講師として招き、人生最終段階における医療・介護について『考える』『話し合う』『伝える』必要性についての研修を開催し、様々な年代・職種の方に参加いただきました。「生活」から人生を考えるトータルケアプランニングも含め、医療・介護、「それ以外」の包括的な視点から自身の最期を考える必要

性を拡げています。

⑨ 哲学対話

これまでの豊中市など周辺地域での哲学カフェの取り組みに加え、伊丹市有岡小学校区まちづくり協議会福祉ネット会議と連携し、超高齢社会でのまちづくり主体的にすすめる地域住民の対話の場づくりに関する哲学カフェのスタイルを応用した協業を開始しました。老いや死など、センシティブな問題も安心して話せる、セーフな対話の場の確保のための研究を継続して進めています。

⑩ 高齢者デジタルデバインドへの取り組み

誰もが一生を通じて学び・成長し続けることの認識を基盤に、困り感の解決よりも「生活の広がり」を重視したシニアのデジタル化を目的に、対面+デジタル活用の地域コミュニティ活動「じじつなぎ」を始めました。また、デジタル使用の不慣れさを、日常の地域活動を通じて助言し合える「ご近所デジタルマイスター」の育成にも取り組んでいます。



「じじつなぎ」の打ち合わせ風景

3. 本プロジェクトのこれから

本プロジェクトは、前プロジェクトからさらにユニークな取り組みを進めているメンバーを迎え、たくさんの追い風を受けて出航することができました。これらの取り組みもすべて超高齢社会というチャレンジングな変化の中でこそ一人ひとりの人生を豊かにするためのものです。多様であるからこそ様々な可能性を秘めている本プロジェクトを、多くの人を巻き込みながら、政策提言や人材育成など様々な成果のアウトプットを出して進めていく予定です。